

令和4年度 第3回 木の文化都市を継承・創出する金沢会議 発言要旨

日時：日時：令和5年3月2日（木） 14：00～16：00

場所：金沢市役所4階 兼六会議室

■議題1：・金沢市木の文化都市推進計画案について

＜指標の全体について＞

・観測指標と成果指標が混同してしまっているのではないかと。KPIとしては成果指標ということで良いのか。観測指標がKPIではないのであれば、観測指標という表現で良いのか。観測するだけの指標なら良いが、成果指標として扱うには不足している印象があり、きちんと整理する必要がある。

・観測指標の目標値を達成したら、成果指標を達成できるということで良いのか。また、実際に取り組んでいる側として重要なのが観測指標であり、社会への影響が成果指標という理解もできる。事業としての目標は観測指標であり、取組の結果の普及度として成果指標がある方がわかりやすい。

・観測指標が一般的な成果目標値であり、いろいろな取組を行った結果として出てくるものを成果指標ととらえられるが、指標の名称は見直した方が良いかもしれない。

・量的な指標と木の文化としての質的な指標があると思うので、分けて考えることが重要である。

・木を扱っている業界全てに価値観を共有するのが木の文化都市・金沢を推進する取組なのだと思う。ターゲット別に取り組む施策や指標のマトリクスがあっても良いのではないかと。

・指標を細かく設定しすぎると、指標の数が増えすぎて正確に把握できなくなることも懸念している。成果指標を文脈的にしっかりつくる必要がある。

### <観測指標の個別の内容について>

・方向性1の指標に関して、素材として山のことを学ぶことは良いが、まちなかで木の文化を学ぶことも必要である。

・方向性1の指標に関して、金沢ではすでに実施してきたものも多くあると思うが、建築や工芸のイベントも加える必要があるのでは。森林に限らずさらには、金沢市主催のものだけではなく、民間主催のイベントの数も測ると良いのではないか。

・方向性3の観測指標として非住宅建築物の木造化率が設定されているが、これは方向性3の「まもる」「つくる」のうち、「つくる」の視点だけである。例えば、町家の減少数や新しい町家の数など「まもる」視点につながる要素も必要ではないか。

・観測指標の中で、供給側の指標と建築側の指標が整合していないことが問題ではないか。方向性3の観測指標である「公共事業における木材使用量（年間）」と方向性4の観測指標である「金沢産材供給量（年間）」の数値があまり整合していないように思われる。

・需要がないから供給量が抑えられているのか、製材業の方でボトルネックがあって、供給の限界があるのかを調べなければならない。林野庁からは全国的に木材の需要が不足しているという意識がもたらされている気がするが、自治体側としては供給側である製材業や林業が苦しいという認識がある。

・考え方としては、例えば資源として金沢産材を〇m<sup>3</sup>出したいので、建築として〇m<sup>3</sup>の木造建築をつくるという設定をして、あと何年でバランスをとるといふ考え方が必要ではないか。国の施策としても、木材がたくさんあるので使ってください、という流れになっているが、現実のボトルネックが明確になっていない。また、木材利用が推進されている一方で、供給側があまり盛り上がっていない面もある。理想的な供給側の循環と建築側の循環の目標をすり合わせる必要がある。

・どのような数値が達成されると目標が達成されるのか、という必要な項目と連関の整理が必要ではないか。まずは穴埋めするための箱をつくり、大きな枠組みを見せて各部局、各団体が数字を当てはめていくと、足りない部分が見えて、頑張る気にもなるのではないか。数値はデコボコがあるだろうが、循環の連関表はずっと変わらないものだと思う。

・現状供給側は、欲しい時に欲しい量の木材を提供できる体制になっていないため、積極的な計画は立てづらいとのことのようなのだ。また、県産材に限らず外材に至るまで木材問屋が供給の上で重要な役割を担っているとのことであった。市民シンポジウムでも、林業と建築を結びつけるコーディネーターの重要性の話があったので、そういった人材を登用するなど、しくみを見直すことが必要である。

・主伐を進める上でも、建築側と供給側の連携が必要だが、スタートは供給側にあると考えている。今ある木材を使うことから考える必要があり、供給側からはどの程度木材を出すことができ、それを建築側でどの程度使うかなどお互いに目標を具体的に出していくことが必要である。

・林業は自由市場ではうまくいかない面もあるので、需要と供給のバランスをみながら目標を設定する必要がある。北海道では、地域産材について市町村単位では循環しきれないので、近隣の自治体と木材の融通をしている事例もある。

・方向性4の指標として、木材の供給だけではなく山の整備に係る指標も必要ではないか。

・方向性5の指標として、『木の文化都市・金沢』推進事業者が増えることだけでなく、事業者間の協力関係を測ることも必要である。金沢市が協力関係をつくる仕掛けも必要である。

### ＜成果指標の内容について＞

・「木の文化都市・金沢」の取組は、金沢市民の木への意識が高いことから始めたものであり、成果指標として木材利用等に関する意識が全国を上回る程度のもので良いのか。

・市民のための取組であるなら、市民が満足していれば良いため、全国との比較は必要ないとも言える。全国を相手にするなら、市外県外から視察に来た人数等の波及効果を指標にした方がよいのでは。

### ＜その他 木の文化都市の推進全般について＞

・10年後にはライバルとなる都市が出てくる可能性もあるが、本来は競い合うのではなく、理想は同じような思想や価値観をもった地域同士がネットワークをつくる中で、金沢市のポジションがどこにあるのか、10年後もトップランナーでいられるかどうか、ということがポイントである。

・金沢は中心部の緑の多さ、市が主体となって造林している点、戦前の木造住宅がかなりしっかりしており、大きなストックとなっている点など、木の文化が高いことはわかっているが、木の文化とは何か、という評価が現代は弱いと感じる。

・例えば、金沢市民全員に認知される言葉をつくることも考えられる。

・主体的に取り組んでいる人や団体はなるべく名前を取り上げて、盛り上げていくことも大事である。民間の人が参加できるような雰囲気を作っておくことで、自身も参加したいという人が出てくる可能性がある。

・伝統環境保存区域外の住宅があまり質が良くないという現状もあるので、中心部では非住宅建築物の木造化をみれば良いが、郊外部では住宅建築物の木造にも着目する必要があるのではないか。

## ■議題2：令和4年度事業の報告

・中層木造仮想設計に関して、仮に実際建てるとなった場合、誰が関わることができるのか。一般的な技術を使うのか、金沢の市内業者の力を結集するのか。金沢の技術の集大成という見せ方をすると良いのではないか。

・普及させることを考えれば、一般的な技術が必要であるが、金沢の集大成を見せるのであれば特殊な技術をアピールすることも重要である。「木の文化都市・金沢」としての技術があるのか。一般的な技術を発信すると、全国で模倣されてしまうという懸念もある。ふたつの技術を意識する必要がある。

・それぞれの時代にそれぞれの技術があり、今の森林資源に基づいた技術もあるはずであり、少ない材料で済まそうとする工業製品の考え方ではなく、木を扱う価値観を養い、太い柱でもデザインができれば、柔らかい杉でも使えるのかもしれない。

・現代の木造を提案する際には、既存の建具類ではスケールが違うため、バランスが今までとは違うものを提案してもらうことで、これまでの文化の延長線上にある、現代木造ができると思う。

・カーテンやブラインドなどの内装に、布などの工芸品も使うと素晴らしい。全体を豪華にする必要はないが、一点豪華主義とすることも、良いのではないか。工芸も含めて、総合的に金沢らしさ、石川らしさを取り込んでいけると良い。

### ■議題3：令和5年度の新規事業について

・推進事業者の登録証のデザインがあり、のぼり旗などでも使われるが、ロゴは別ものとして、木の文化都市を推進するにはロゴをきちんと作成した方が良く、と考える。ロゴの認知度を一つの成果指標とすることもできると思う。

・ロゴを作るワークショップをしても良い。このような取組は、当事者になって欲しい人がたくさんいるので、いろいろな取組がつながっていることを意識してもらおうと良い。

・自分が循環の中のどこにいるかがわかる「林業」「工芸」「建築」等を示したバッジのようなものがあるとわかりやすい。

・メインテーマである木の文化都市は、誰もが総論的には賛成したくなるものであるが、具体的な取組となるとわかりにくく、参加の仕方がわからない面もある。ロゴのような印象的（象徴的）なものが必要ではないか。